

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

満場一致で決まるはずだった。自信はあった。発表したときのみんなの反応は、ばっちりだったし、担任の本宮先生も、いいぞ、というふうに大きくうなずいていたし、書記をつとめる川原くんは、きみの発表した案をひときわ大きく黒板に書いてくれた。

〈信号は 渡る前にも 左右〉

交通安全の標語だった。来週から始まる秋の全国交通安全週間に向けて、全校でクラスごとに標語とポスターをつくる。五年三組の標語は、きみの考えた案で決まり——のはずだった。

ライバルはいない。他の案はどれもつまらない。〈雨の日は 傘を差すから 危ないよ〉だの〈気をつけよう ガードレールの ない道路〉だの〈行き帰り まっすぐ前見て歩こうよ〉だの……。

標語の上手い下手なんて、ほんとうはきみにもよくわからない。みんなにもわからない。だから、おそらく、きみが勝つ。和泉文彦——「ブンちゃん」が考えた標語だからというだけで、みんなの頭には、それが一番なんだ、という

のが刻み込まれる。

五年三組はそういうクラスで、きみは、そんな五年三組の、間違いなくヒーローだった。

「他に意見ありませんか？」

司会の細田くんが、教卓から教室を見まわして言った。

「決まりだろ、もう」

すかさず三好くんが言った。「ブンちゃんのでいいじゃん、サイコーだもん」とつづけ、きみをちらりと見て、へへっと笑う。

「だめだよ」きみは怒った顔で言った。「ちゃんと投票して、多数決で決めようぜ」

はつきりと「勝ち」がわかったほうが気分がいい。負けるはずがない。勉強でもスポーツでも、五年三組の男子できみになう子は誰もいない。

「じゃあ、投票にする？」

細田くんは、自信なさげにきみを見て言った。学級委員のくせに、困ったときにはいつもきみを見る。一学期の学級委員はきみだった。「委員を務めるのは一年に一度だけ」という決まりさえなかったら、二学期もきみが委員に選ばれていたはずだった。

「さんせーい！」

きみが手を挙げて応えようと、細田くんは顔に
なり、ようやく学級委員の威厳を取り戻して「じゃあ、投票にします」と言った。そこまでは筋書きどおりだった。

でも、黒板に向いた細田くんの視線を引き戻すように、教室の後ろから声が聞こえた。

「意見、言っているんですか？」

耳慣れない男子の声だった。あいつだ、とすぐにわかった。二学期から入ってきた転校生——五年三組の一員になってまだ十日足らずの、中西くんだ。

予想外のことに細田くんは言葉に詰まり、救いを求めるようにきみを見た。

出端をくじかれたきみはムツとして、でもそれを顔には出さずに、いーんじゃない？と目で応えた。その視線を、中西くんに向けて滑らせる。おとなしい奴だと思っていた。前の学校は、市役所の近くの城山小学校だった。二丁目に建ったばかりのマンションに引っ越してきた。知っているのはそれだけだ。

中西くんは席に着いたまま、黒板を指差して「和泉さんの提案した標語、いいけど、ちょっと間違っていると思う

ます」と言った。「直したほうが、ずっとよくなるから」

教室は一瞬静まり返った。男子の何人かがきみを振り向き、女子の何人かは怪訝そうに顔を見合わせた。

中西くんは落ち着いた口調で、きみの標語の間違いを説明した。このままでは意味が通らない、渡るのは横断歩道や交差点なんだから「信号を渡る」という言い方はおかしい、「渡る前」と言うのなら、「信号」ではなくて「横断歩道」や「交差点」に替えたほうがいい……。

教室がざわついた。男子は困惑顔できみと中西くんを交互に見ただけだったが、女子は小声でしゃべりながら、そうだね、とうなずいている子が多かった。きみはあわてて本宮先生の顔を盗み見た。先生は腕組みをして、ふむふむ、と中西くんの意見に納得している様子だった。

「だめだよ。変だよ、変だよ、それ」

きみは声を張り上げる。「絶対だめだよ、そんなの、そっちのほうがおかしいって」と一息につづけ、そこから先はとっさに考えたことを口にした。

「『交差点』なんて言っても、一年生や二年生だと意味わからないよ。難しい言葉つかってカッコつけても、意味がわかんなかったら標語にならないから、だからオレ、わざと

『信号』にしたんだよ」

中西くんをにらみつけた。でも、中西くんはきみには目を向けず、細田くんにもっといい直し方があります」と言った。

冷静な中西くんの口調や表情に吸い寄せられたみたい、に、細田くんは「発表してください」と応え、川原くんもチヨークを持って黒板に向かった。

〈信号は 青になっても 右左〉

黒板の字は、途中から——「青になっても」の一言に、川原くんが、あ、そっか、とうなずいたのを境に大きく変わった。

教室のざわめきも、どっちつかずで揺れ動いていたのが、しだいに一つの声の束にまとまっていった。うなずくしぐさがあちこちで交わされる。三好くんが、ブンちゃんどうする？と心配そうにこっちを見ていた。それがうつつうしくて、よけい悔しくて、きみはそっぽを向いて椅子に座り直し、窓の外を見つめた。

「じゃあ……いまの中西くんの提案も入れて、どれがいいか……投票に、します」

細田くんが気まずそうに言った。きみは窓の外を見つめ

たまま、空に浮かぶ雲の輪郭を目でなぞる。勝てない。わかっていた。

五年三組、男女合わせて三十七人のうち、中西くん本人を含む二十三人が〈青になっても〉に投票した。きみの〈渡る前〉にも手を挙げたのは十人——いつも「ブンちゃん、ブンちゃん」とまとわりついてくる連中ばかりだった。

きみは、中西くんの標語に手を挙げた。他の誰にも負けないぐらい右手をピンと伸ばして、高く掲げた。でも、中西くんは、「では、五年三組の標語は、中西くんが提案した……」と細田くんが言いかけるのを制して、最初と変わらない落ち着きはらった態度で言った。

「和泉くんとぼくの合作です」

ゴム印で軽く捺されただけだった「負け」が、その瞬間、焼きゴテで強く胸に押しつけられたような気がした。

中西くんの下の名前は、「基哉」という。前の学校では友だちから「モトくん」と呼ばれていたらしい。五年三組でも、標語の一件をきっかけに中西くんを「モトくん」と呼ぶ子が増えてきた。転入したばかりの頃はおとなしかった中西くんも、新しい環境に馴染んできたせいか、標語の投票でトップをとって自信をつけたのか、少しずつみんなの

輪の中に入るようになった。

入ってみると——中西くんは、みんなの予想以上にデキる奴だった。

交通安全週間のポスターは、図画の得意な十人ほどでつくることになった。持ち寄った下描き^{した}の中では、きみの絵がいちばん上手^{うま}かった。〈信号は青になっても右左〉と標語をレイアウトするときには少し悔しかったが、「やっぱりブンちゃんって絵が上手いよなあ」「さすがだよなあ」とみんなに褒められて気を取り直していたら、中西くんが「こんなのだう？」と下描きを持ってきた。すでに色がついていた。絵柄^{えがら}の一つ一つが大きく、くっきりとした色使いで、標語の文字もおとなのつくったポスターみたいにきれいだった。

負けた。すぐにわかった。きみが苦労した左右に首を振る子どもの姿も、中西くんは楽々と描いていた。きみは一人の男の子に首を振らせて、マンガみたいな横線を何本も描いて動きを表現していたが、中西くんは右を向いた子を三人、左を向いた子を二人描いていた。そのほうがずっと自然で、〈青になっても右左〉の様子もはつきりと伝わる。みんなも同じことを感じていたのだろう、標語を決めた

学級会のとときのような沈黙^{ちんもく}が、きみを包み込む。

「……あ、でもさー」

三好くんがあわてて言った。「モトくん、ポスター係じゃないから」——きみをちらりと見る視線がわずらわしくて、「ポスターはポスター係でつくるんだからさあ」と笑う表情がうつとうしくて、なにより「モトくん」が気に入らない。

「関係ねーよ、そんなの」

きみはそっけなく、怒った声で言った。誰の顔も見たくなかったから、半ズボンのポケットに両手をつっこんで、体を揺すりながらつぶけた。

「ポスター係なんて誰が入ってもいいんだし、もう色まで塗^ぬってるんだから、中西の絵でいいよ、中西、上手いもん、いいよ、すごく、オレのより全然いいって、マジ、ほんと」

せっかくの援護射撃^{えんごしゃげき}が無駄^{むだ}になった三好くんは、それでもきみに気をつかって、

「すっげー、モトくん、ブンちゃんに褒められるってすげーよなあ」と大げさに驚いた^{おどろ}。

中西くんは、へえー、とあきれた顔になって、「べつに

たいしたことないと思うけど」と、誰にもなく言った。

（重松清『きみのともだち』による）

【注】

* 出端をくじく——始めたところを邪魔^{じゃま}する。

* 怪訝——不思議でよくわからない。

問一——線部A「きみの発表した案をひときわ大きく黒板に書いてくれた」とあるが、字の大きさには川原くんのどんな気持ちが表れているか、答えなさい。

問二——線部B「きみは怒った顔で言った」とあるが、ブンちゃんがわざと怒った顔をして見せた理由を答えなさい。

問三 に入る最も適切なことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 納得した イ とまどった ウ ほっとした エ びつくりした

問四——線部C「教室は一瞬静まり返った」とあるが、教室が静かになった理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 中西くんがどんな考えを持っているか期待したから。
イ ブンちゃんに対して異議を唱える者が出てきて驚いたから。
ウ 中西くんが転校生のくせに刃向かうので無視しようとしたから。
エ ブンちゃんがせっかく提案をしたのに反対されてかわいそうに思ったから。

問五 — 線部D「それがうつとうしくて、よけい悔しくて、きみはそつぽを向いて椅子に座り直し、窓の外を見つめた」とあるが、「よけい悔しく」させた、ここでの悔しさを二つ答えなさい。

問六 — 線部E「他の誰にも負けないぐらい右手をピンと伸ばして、高く掲げた」とあるが、この行為は、みんなへのどのようなアピールであったのか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 負けた自分のプライドを守るために、公平に正しく判断している姿勢を見せる。
 イ 自分の負けを潔く認めて、中西くんの提案にみんなが賛成するようにしむける。
 ウ まとわりつく連中にうんざりして、腹立たしさから、みんなの同情の視線を拒絶する。
 エ クラスの雰囲気から、自分が孤立しないために、中西くんのアイデアに賛成して見せる。

問七 — 線部F「なにより『モトくん』が気に入らない」とあるが、三好くんの発言がなぜ気に入らないのか、理由を答えなさい。

問八 — 線部「ゴム印で軽く捺されただけだった『負け』が、その瞬間、焼きゴテで強く胸に押しつけられたような気がした」とあるが、「ゴム印で軽く捺された」負けと、「焼きゴテで強く胸に押しつけられた」負けとの違いがわかるように、百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の近代都市における消費の形態を歴史の大きな流れのなかでとらえると、はじめにハイカラなデパートがあった。それは、町の高級商店街がビルのなかにそっくり入ったショッピング・ゾーンである。さまざまな店舗が^①一か所にまとまるとともに、高級イメージのディスプレイで庶民のハレの日を演出した。デパートの次はスーパーマーケット。こちらは市場が近代化されたようなものだ。商品が^②ホウフで、価格もデパートに比べてうんと安い。高級感はずいぶんないが庶民の日常のニーズにはしっかり^③応えるものだ。そして近年はコンビニのタイトウである。

デパートからスーパーへ、そしてコンビニへ、という流れを見ていると、それは戦後の家族の食事の形態の変化とどうも^④パラレルに変化してきたような気がする。それに、食事の時間や回数の変動と微妙な相互影響もある。

デパートの大食堂は、和食・洋食・中華料理が勢ぞろい、かつては外食の殿堂であった。デパートで買い物をして、そのあと食事をするのが子どもたちの楽しみであり、家族にとってもそれは特別な日、ハレの日だった。その背

景には、しっかりとした家族の絆があった。日々の食事は家族みんなが食卓を囲んで【Ⅰ】していた時代である。

スーパーが定着したこと、街のあちこちで見られるようになったのがファミリー・レストラン。文字どおり家族づれをターゲットにしたレストランである。ここは家族で行くということに意味がある。高度経済成長のなかで、お父さんは家族よりも仕事にウェイトを置くようになった。残業が終わると同僚と居酒屋で一杯。帰宅は夜遅くなる。日曜日でも付き合いいゴルフが待っている。子どもたちは受験競争のなかでの塾通い。家族がともに食事をする時間が極端に減ってきた。【Ⅱ】の時代である。そこで、家族がいつしよに食事をする機会を作り、その絆を確認するための施設としてファミリー・レストランが流行りだした。

そして、いよいよコンビニの時代。その急成長の陰には単身生活者の存在がある。単身生活者は急に増えたわけではないが、その生活形態が従来とは変わってきた。地方から出てきた学生が、賄い付きの寮や下宿を^⑤ケイエンしてアパートやマンションに住むようになり、食事の段取りをし

なければならなかった。働く独身女性も増えてきた。結婚の年齢が高くなり、独身時代が長くなる。彼女たちも食事を作らなければならないが、会社から帰って自分一人のために調理をするのは大変なので、コンビニや「ほかほか弁当」で買って帰るようになる。ついに「Ⅲ」の時代である。

このような食事時間や食事形態の多様化が、レストランの深夜化、^{*}テイクアウトショップ利用者の低年齢化、コンビニの急増を促したといえるだろう。都市におけるこうした現象は、ますます進展しつつある。その結果、食の形態にもいろいろ変化が起こりだす。

- 1、食事の時間や一日の食事回数の秩序が大きく揺らぎだしたことが見のがせない。ひとりっきりの生活というのは、時間を調節しにくい。家族との生活においては、その共同生活の段取りが時間のペースメーカーになる。ひとりだと、朝・昼・晩、一日三食が原則だった食事が、四食、五食に知らぬまに分割されているということもある。
- 2 三食のうちの一食分をスナック菓子や機能性食品で済ますこともある。

学生時代に軽い過食症にはまったときの話を、最近、

ツシュ、えんぴつ、香典袋など、どこの家にもある日用品の類だ。夜中に急に入り用ができて近くのコンビニに走れば、必要なものは揃う。食べ物や飲み物もあるから、家の冷蔵庫の役割もはたす。その意味で、単身者にとってコンビニは机の引き出しであり、冷蔵庫でもある。夜帰ってきて「なにか食べるものはないかな」と冷蔵庫や戸棚を探る感覚でコンビニに行く。いわば自分の部屋、家庭のエンチャウであり、これまで家の中にあつたものを外に出してしまったといえる。特に単身者には弁当やお惣菜が人気だ。電子レンジも用意されており、調理したてのあたかさで食べることができる。コンビニは今度は自分の家の台所に早変わりする。

(中略)

そしていま家庭のなかから最後に外在化されつつあるのが調理の過程である。が、これはわれわれの文化にとつて大きな痛手になると思う。コンピュータによって記憶能力が外在化するよりも危なっかしいことかもしれない。というのも、調理をするという行為は排泄物の処理と並んで、

ある女性から聞いた。東京に出て独り暮らしをするようになって、知らないあいだにひどくダメージを受けていたのが身体。とくに食べること。外で買ってきて二分ですまそうと思えばすませるし、だからいつでも食べつつけていることもある。そのうち、食事というものがいつ始まり、いつ終わるかがつきりしなくなる。満ちたりたという感覚がないので、ついに物理的な膨満感がくるまで、

- 3 食べられなくなるまで食べることになる。家にいるときはそうではなかった。なんとなく台所から音やにおいがしてきて、眼でしかと見て、一膳か二膳いただいで、「ああ、おなかいっぱい」とか言って、「宿題せんらん」と叫びながらバタンキュー。つまりそこには段取りというものがあつたというのだ、他人と共同で生活しているがゆえの。食欲というものからリアリティ(現実感)が薄れてゆく。だから加減がわからなくなる。生きるということの核にあるはずのもの、そのたががなんか外れてしまったみたい、というのだ。

コンビニで売られている商品は、ほとんどが家のなかの引き出しに入っているのと同種のものだ。ハンカチやティ人間が自然と接触する数少ない機会だからである。命あるものを殺したり、切り刻んだり、煮たり、焼いたりして調理するのが食べものである。魚、肉、野菜いずれも生命をもっている。人間がどんなに文明化されようとも、食べるものの多くは生き物であるという事実は変わらない。つまり調理することは、われわれがいかに自然と折り合いをつけていくかが問われる現場でもある。ふだんは忘れてしまいがちな自然だが、絶対に離れては生きていけないことを痛切に思い知らされるのが調理する場、すなわち台所である。いま、その台所を外に出しつつある。おながすくと、深夜・早朝にかかわらず、外の台所、まで走るのだ。われわれが台所よりも先に家から外に出たのが、病気の世話であり、出産であり、死であつた。誕生・病気・死は、人間がもつとも自然の近くに在るわけで、「自分は生き物である、いま生きているんだ」と実感する現場でもある。その重要なシーンが、病院など非日常的な空間で展開されることにより、日々の暮らしと遊離してしまっている。そして排泄物の処理もいまや水洗の普及で、家庭内から去った。そんななかで、自然との接点として家庭内唯一残っていたのが調理である。いわば人間が人間らしく

生きるための最後の^{*}牙城^{がじょう}といえる。自分自身の生の証^{あかし}を確認する場面が家の外に出たことで、生活の原点が希薄^{きはく}になり、現実と非現実の境界がしだいに崩^{くず}れてきた。そのため、自分の座標軸^{せいひょうじく}がうまく成り立たなくなったような気がする。そして、われわれの生活は無意識のうちに自然から遠ざかっている。

(鷲田清一『普通をだれも教えてくれない』による)

*座標軸——行動するときに出発点とする考え方や立場。

【注】

*ディスプレイ——ショーウィンドーの飾^{かざ}りつけ。

*ハレの日——あらたまった特別な日。

*ニーズ——要求。

*パラレルに——いっしょに。

*殿堂——立派で大きな建物。

*テイクアウトショップ——その店で食べるのではなく持ち帰りのできる店。

*宿題せんならん——宿題をしなければならぬ。

*たがが外れる——気持や組織などがゆるむ。

*外在化される——外に置かれる。

*牙城——城の中心。

問一

1

3

にあてはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは

イ さて

ウ だが

エ たとえば

オ つまり

問二 「Ⅰ」「Ⅲ」にあてはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 〈共食〉

イ 〈欠食〉

ウ 〈個食〉

エ 〈絶食〉

オ 〈分食〉

カ 〈飽食〉

問三 ——線部A「ここは家族で行くということに意味がある」とあるが、それはなぜか、五十字以内で答えなさい。

問四 ——線部B「こうした現象」とはどのような現象か、三つ箇条書き^{かじょうが}にしなさい。

問五 ——線部C「いま……思う」とあるが、調理しなくなることがなぜ「大きな痛手になる」というのか、わかりやすく説明しなさい。

問六 ― 線部D「自分は生き物である、いま生きているんだ」と実感する現場」と同じ意味で用いられている表現を文中から探し、十五字以内で抜き出さない。

問七 ― 線部「食欲というものからリアリティ(現実感)が薄れてゆく」とあるが、筆者が考える「リアリティのある食欲」とはどのような食欲のことをいうのか、百字以内でまとめなさい。

問八 〰 線部①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。